向テ水平ニ發育シ此ノ齒根ノ分離ヲ來スモノデアルトノ説ハ正シカラザルモノデアルトノ結論ニ達シタ。即チ著者ニ從ヘバ齒根分岐部ノ狀態ハ齒冠部發育ノ完成セル遙カ以前ニ決定セラル、モノデアツテ齒根分離ノ狀態ハ前述ノ如クヘルトウツヒ上皮鞘ノ水平方向ニ發育スルコトニ依リテ生ズルモノデハナク齒芽ノ基底開口部ノ不規則ナル外的發育増大ニ依リテマツ其ノ外形ヲ定メラレル。此ノ不規則ナル發育ニ際シテヘルトウツヒ上皮鞘ノアル一部ハ固定部位トナツテ比較的變化ヲ受ケナイガ後チニハ此レ等ノ固定部トナツタ突起モ漸次増大シ遂ニ相癒合シテ完全ニ齒根ヲ分離シテ所謂分岐部ヲ形成スルノデアアル。著者ハ本研究ニ依リテモヘルトウツヒ上皮鞘ハ固定點デアツテ其ノ一定部位ヨリ齒芽ガ外方ニ向テ發育スルモノデアルト云フ觀察ヲ確實ニスルコトヲ得タト稱シテタル。

齒科外科

上顎前齒部囊腫手術ノ際バーチ氏第

一法應用ノ疑義

Dr. L. M. Lindenbaum; Zur Frage über die Anwendung der 1. Methode von Partsch bei Operationen an Zysten,

抄 錄

die sich im vorderen Abschnitt des Oberkiefers lokalisieren. Zeitschrift f. Stomatologie. Heft 6. 1923)

バーチ教授ノ「顎骨囊腫ノ療法」ノ仕事ニ於テ彼ノ第二法即チ囊腫全摘出ト共ニ囊腫腔ノ閉塞ヲ行フ方法ヲ創始シ多クノ臨牀例ノ經驗ニヨリ囊腫ヲ此方法ニテ手術スルニハ嚴格ナル消毒ノ下ニ全囊腫囊ヲ注意深く除去スベキデアルト結論ヲ下シテオル。

著者ハ此方法ニ依テ如何ナル大イサノモノマデ摘出ヲ行ハレ得ベキカ又囊腫腔ガ上顎竇ニトバイテ居ルトカ口蓋ノ粘膜ニ穿孔ヲ伴フ口蓋骨ノ強キ侵蝕ノ場合等ニ應用能力ガ那邊迄達シ得ラル、カヲ検査セント欲シタ。爾來十七年ヲ經過セルニ此間文獻ニ於テ此問題ノ下ニ多クノ仕事ガ現ハレテオルガ其觀察ハ次ノ二ツノ傾向ニ分ツ事ガ出來ル。

一方ノ學者達(ヘッセ、クリッチ、シュナイダー、ダニルスキ氏等)ハ囊腫ノ如何ナル大イサノモノデモ手術の處置ニ對シテ此方法ノ有用ナ事ヲ臨牀上確定シテ居ル。

然ルニ他ノ人達(ランゲ、リヒテル、マエルホフアー、ゲルベル、リムベルヒ氏等)ハ鼻腔ト硬口蓋ヲ結ベルハイモリー氏竇ニ穿孔ノ恐アルヲ以テ新シイ方法ヲ見出スニ努力シテオル、エナノヘッセ教室デハ既ニ六、七年前ヨリバーチ氏ノ第一法ハ放棄シテ單ニ彼ノ第二方法ヲ應用シテ居ル。

クリッチ氏ハ近時彼ノ教室デ三八ノ囊腫例ヲバーチ氏ノ第二方法デヤツタ。ソシテ手術後一ヶ月ニシテ其囊腫ヲレンチェン検査ヲ行ツタ所ガ多クノ場合囊腫腔ハ非常ニ小サクナリ囊腔ガ骨組織新生デ充滿シテ居ルノヲ見タ。

シュナイダー氏ハバーチノ第一方法ニ依テ開放治療ヲシテ置イタ囊腫ノ大部分ガ不結果ヲ來シテ居ルノデミューンヘン大學ノ齒科部ニ於テ今ヤ全摘出ヘト移ツテ行ツテ居ル一七ノ囊腫例ヲ此方法デ手術シタ所ガ其中四五例ハ卯位ノ大イサガアツタガ治癒機轉ハ幸福ナル經過ヲトツタ。

ダニレンスキー氏ハモスコ一口腔病研究所ノ外科部ニテバーチノ第一法ハ全ク捨テ、同様ニ全摘出ヘト移行シテ居ル。

ランゲ教授ハ多クノ臨牀材料ト彼ノ非常ニ多クノ實驗トニヨツテ上顎ノ大ナル囊腫ハ化膿シテ居ラウト化膿シテ居ルマイトカルドウェルツク氏法ニヨツテスベキデ凡テノ上顎骨ノ大キイ囊腫デ高サガドウデアラウト量ガドウデアラウト無條件デ採用シ上顎竇ト結合セキバナラヌト云ツテ居ル。

以上ノ如ク著者ハ文獻ノ大體ヲ記述シタル後上顎前齒部ニアル囊腫ヲバーチ氏第一法ニヨリ開放セルマ、ニシテ置ク事ハ患者ニ對シ苦痛ガ多ク不結果ナ場合ヲ示シタ二例ヲ舉テオル。

第一例、患者ハ三十四歳ノ婦人デ一九二六年七月ニ上顎側切齒ノ

周邊ニ横タハル囊腫ヲバーチ氏第一法デ除去セシニ二ケ年ヲ經テモ空洞ハ小サクナラズ排膿ヲ見翌年五月又更ニバーチ氏第一法デ手術シ同年ノ十二月ニ始メテ患者ハ我々ノ病院ニ來ツタノデバーチ氏第二法ニヨリ手術シタ。

第二例ハ三十二歳ノ男性患者デ一九二七年一月二十日ニゴッフィング教授ノ所ニ來リ囊腫手術後一年程殘遺セシ空洞ヨリノ排膿及刺戟ヲ訴ヘ不愉快ナル臭ヲ生ジ食物殘渣ハ注意深キ看護ヲナスニ拘ラズ空洞中ニ挾マリ患者ヲ惱マス事甚シキバカリデナク口臭惡臭ヲ訴ヘシメタ。

其所デ一九二八年一月二十二日バーチ氏第二法ニヨリ手術ヲ施シタ所四月二十四日頃ニハ全身狀態良好トナリタ、輕微ノ浮腫ガ來テ居ツタ五月十日ニハ手術シタ場所ノ狀態ハ非常ニヨクナリ粘膜ハ正常ノ色ヲ呈シ附近ノ粘膜ニモ變化ナキニ至ツタ。

前二例ノ場合ニ於テバーチ氏第一法ニヨル囊腫切除後數ヶ月ニシテ上顎骨ノ前方部分ニ第二法ガ必要ニナツテ來タ。

第一例ニ於テハ三度モ手術シナケレバナラナカツタ第二例ニ於テハ空洞ガ一年モ收縮セナイデ患者ノ生活ヲ不愉快ニシタ。

モシ此囊腫ライキナリバーチ氏ノ第二法デ手術セバ患者ハ一ヶ月位ノ苦痛デ二度ノ手術ヲ節約シ得タノデアル。

多クノ醫師ハ囊腫ヲバーチ氏第二法デ手術スルトキハ血塊ノ崩解

スルヲ恐レタ。然シシェーデ氏ノ臨牀検査ノ結果此疑問ハ案ズル程ノモノデナイ事ガ證明サレ五十瓦ノ液體ヲ容ル、様ナ囊腫デモ閉塞シテシマツテ差支ナイ事ガ知ラレタノデアル所デ此位ノ大イサノ囊腫ニ會フ事ハ非常ニ稀ナ事デアル。

非常ニ多クノ統計的材料カラ見テモ比較的大キイ囊腫デモバーチ氏ノ第二法デ摘出スルノガ最モヨイト云フ事ヲ文獻ニ於テ證明スル事ヲ許サレテ居ル故ニ囊腫ノ手術ニ對シテハ此方法ガ最モ適當シタ方法ニ思ハレルト。

最後ニ結論トシテ著者ハ左ノ如ク述テオル。

一、上顎前齒部ニ現ハレタル囊腫ノ手術ノ際バーチ氏ノ第一方法ハ合理的デナイ様ニ思ハレル。

二、若シバーチ氏ノ第二方法ガ何等カノ理由ニ依リ行ハレ得ナイ場合ニノミバーチ氏第一法ハ大ナル空洞ヲ有スル場合ニ應用サルベキモノデアル。

三、バーチ氏第一法ニヨリ手術シタ後ニ囊腫腔ニ長期間患者ニ苦痛多キ肉芽新生ヲ生ジタ場合ニハ將來解剖ノ關係ガ許サル、ナラバ囊腫腔ノ整形閉塞法ニヨリ囊腫囊ノ全摘出ヲナサナケレバナラヌ。

保存療法科

腐敗根管ノ治療法トシテノハウエ氏

法及ビ齒牙周圍組織ニ及ボス其影響。

實驗的研究

Die Howesche Methode zur Therapie der gangränösen Wurzelkanäle und ihr Einfluss auf das Parodontium. Experimentelle Untersuchungen. Von Dr. G. L. Feldmann (Moskau). D.M.f. Zahnheilkunde. H. 17, Sep. 1928.

ブライスウエルク、フィッシャア、ヘス氏等ノ研究ニヨリ組織學的ニ根管治療ノ困難ナル原因ガ明示セラレルト同時ニ、マイルホウフェル氏ハ藥物學的細菌學的ニ根管治療ハ殆ンド不可能ナリトマデ極論シ來レル狀態トナツテ居ツタ。然ルニ、一方、アルブレヒト、シュレーデル、ハウエ氏等ニヨリ、バックレー氏法ヨリモ一層學理的ノ方法ガ發表セラレタ。

アルブレヒト、シュレーデル氏ノ方法ハ、吸收ヲ受ケズ、消散セズ、且ツ根管ノ全内面ヲ氣密ニ閉塞スル様ナ殺菌劑ヲ以テ根管ヲ充填スル方針ニヨルモノデアツタ。

ハウエ氏ガ十年前提言シタ方法モ亦右ト目的ヲ同ジクスルモノデ、根管ヲ消毒シ、齒細管及ビ根管側枝ヲ銀デ閉塞シテ、其處ニ